

研究会資料

昭和五十二年一月二十三日

第五十二回研究会

会田家について

越谷市郷土研究会

理事 山崎善司

越ヶ谷会田氏の先祖の地を訪ねて

始めに

越ヶ谷町その周辺を見ますと 会田姓を名乗る人達が
 実に多い事に気が付きます。そして越ヶ谷宿と言わ
 れた近世の宿駅の中や その周辺の周産には必ず 会
 田姓の名が見えます。では、この会田姓の人達は 何時
 頃 何故 越ヶ谷の地に居住したかと言ふことが知り
 たくなつてきます。この件に關しましては、すでに越

ヶ谷瓜の蔓・新編武蔵風土記・静岡会田家譜資料・

そしてこれと説明す。 オナ二回 越ヶ谷会田出羽家と

神明下会田七左エ門家 オナ三回 史跡めぐり資料

オナ四回 会田氏と越ヶ谷御殿 オナ四回 史跡めぐり資料

大門会田家 東武地方史解明調査会々報(1) 近世

村落の成立(1) 越ヶ谷会田氏と越ヶ谷御殿の研究等

で 周知の如くであり 越ヶ谷市史にも その資料等

統て収録され盡くされて今更申上げる事が無い程に

研究されて居ります次第で御座います。

然るに尚又会田氏の事について申上げる事は、先の
 研究者への望(ま)と心苦しく思う次第で御座いますが、
 私は私なりに理解しにくいところとか矛盾のある処を
 追及して見たのであります。困惑致しておる次第です。
 今迄のところの経過発表というところで止めさせて裁
 き御了承願えればと思ふ次第でございます。

昭和五十二年 一月二十三日

山崎善司

会田家に因する資料にもとづき見てまいりますと、いろいろと矛盾を感じたり不明の点などがあり、私の理解力が不足しているのが原因です。これを列挙してみますと、次のようになります。

一、越々谷仙の變 市史四の五十三頁上十行 中町会田五郎兵工元祖会田出羽義八天正以前海野小太郎、信州会田ヨリ郎等六家同道ニ而罷懸候大家ニ而御殿馬場ニ陣屋住居致、今袋町入口ヨリ左ニ方出羽屋敷道通也、云々。この中に

(1) 会田出羽義八 天正以前

(2) 信州会田ヨリ郎等六家同道ニ而罷懸

1. 会田出羽は眞実、信濃国会田郷より来たのか、
2. 時期は天正以前と有るか、何時なのか、
3. 六家同道とは、何々家が、
4. 向改一族引き連れて、越々谷という遠い国へ罷り越したのか、

二(1) 越々谷仙の變 市史四の五三 下一行 同末行

落居の頃 会田七郎と申

是は海野党落居之節付未候者

(2) 同市史四七十三頁下五行 中町組

元末会田出羽等は海野小太郎子孫に而信州会田ヨリ天正年中、越々谷村へ移居、越々谷領一円に所持致居候也

1. 疑問一では、天正以前六家同道に有り 疑問二では、天正中越々谷村へ移居 又落居の頃 又 海野党落居之節と、前と区別して書かき分けている事？、

2. 落居の頃 会田七家と申すは、と七家有るか疑問

一に有る六家同道とは別であるのか？、

ハズレ門は名字と異なりて会田と有る
(七五正門は当地での分家也)

3. 越々谷領一円に所持致居候也と「也」の字がついて、いることは、前々より一円を所持して居、たが、今は全然無くなったと云う意味なのか？、

疑問三 会田家諸資料 六頁 市史一 四、一頁 会田家系図

会田家諸資料

会田中務丞 会田小七郎 小七郎 会田中務丞

時信 — 幸 豊 — 幸久

大永享探之前 幸豊軍功あり 弘治初氏戚の犯と伺す

信清 松壽丸

北條氏より武州領之内江戸下木川一帯西小岩云々 当時代官職

会田出羽 資清 — 資久 — 資重 — 資信 — 資盛

父 幸久と伴て 武州越谷に住す

寛永諸家系図伝

出羽 庄七郎 七郎左門 小左門

資清 — 資久 — 資勝 — 資久 — 資信

生国武蔵 出羽の旗主 生国同前 大橋現に住す 生国同前 生国同前 生国同前 將軍家に仕えり

寛政重修家譜

出羽 庄七郎 七郎左門 源右門

資清 — 資久 — 資勝 — 資重 — 行重 — 資盛

大田下松守某に住す 北條氏に仕え元正十八年 大田三宗齊資正が 加惣親しむにより 資清の字を代て使す 國越谷に住す

資忠 又六 資信 資盛

会田資清が越谷に居住した理由が、父將監相伴して
信州自り武州越ヶ谷に到り而比前に居住すると、これ
は越ヶ谷氏の夢等に書いてある、こと一致する。

常々太田美濃守三梁資正 会田氏と加憲意而視しき
故資の字を授く、依って是れ自り子孫資の字を用ふと
有るは、太田三梁資正が 天文十五年四月 川越交
戦に北条氏に敗れ 八月二十三日松山城を還し十月十
九日(別説有り)岩付城を信濃守資時とす。

以後太田美濃守資正城主となる。？ 天文十七年正
月十八日岩付と北条氏康と和議を成し 氏康兵を退く
か、この時 資正の長子氏資(当時六才)と、氏康の女
(当時三才)と婚約成立す。 天文十五年より十九年
後の永祿七年正月八日国府台の合戦の大敗により資正
の子源五郎氏資の家として 北条氏康の女が嫁入りを
する。 同七年七月十三日岩付城より美濃守資正二子
政景 江戸太田資高の子康資等逐放されて常陸の佐竹を
たより逃れる迄の間の足掛十九年間の間でないとなら

ない。三梁資正は太田北条きらいであるので 北条
方の被害である。幸久の子資清と資の字を授くる程親
しくなれたらどうか？ 幸久―資清父子は どう
しても上杉方でないはずはない。

疑問 四 幸久―資清父子が小田原方であるとすれ
ば、それ以前の天永五年(一五二五)越江三郎小田原
方への内通により太田資頼石戸城に逃れる 岩付城は
小田原方となる

享祿三年(一五三〇)六月小沢原で上杉討共は氏綱氏
康父子と対陣 太田資高北条陣中に有る時 岩付城を
太田資頼攻め守將越江三郎を討取り岩付城を奪還す。
上杉方の太田氏の城となり(岩付港談) 天文二年
(一五三三)太田美濃守資頼知梁斎道平は太田資時に
家督を比すると伝う。この資時は小田原方である。
(江戸太田資高の弟に資時名有り) 太田美濃守資正
の兄資時となっているが、いづれにしてもこの
資時の時代すなわち 天文二年より天文十五年の間に

越谷に来た事になるが、資の字のことが有るので一寸うなづけない。

疑問 五 越谷の蔓 市史四七七十二頁 中野祖

天正年中越谷村へ塾居すと有るが資清の兄が小田原方の家臣として小田原分限帳に載つて居る程の人ならば永禄七年太田氏資が小田原方の岩付城主となり、永禄十年八月三搦^{はな}球外に於て小田原勢の支援に赴き、翌年十三名と共に討死した三三郎、それ以後小田原の北条氏政の城となった。その時代に会田資清が塾居ても必要がない筈である。塾居したのならば会田資清は上杉方でなければならぬ筈である。

疑問 六 新編武蔵風土記 卷二百三 河上郡

越谷領 越ヶ谷宿 出羽堀

宿の坤の方を流れる 悪水堀と云、相伝ふ会田出羽介正之当所に住し堀開きしをもてかく堀ふと、会田氏のことは後谷村旧家者富古エ門の條見ゆべし

越谷の蔓 市史七六 下段 出羽井堀の儀 会田出羽
願立新堀堀当り申候所

卷二百五 河上郡八條領 後谷村

旧家者富古エ門、代々名主を勤む、氏を会田と称す元越谷に住し、其後當所に移れりと云、中畧 会田家系図を見ゆに、会田三郎右エ門正重は出羽介正兼が孫源太郎^{正富}の子なり。当国鉢形^{正富}の城主北條安房守氏邦が麾下に屬し、越ヶ谷の地に住す、其子若狭正方は太田十郎氏房に従つて討死す。長子若狭正忠二男出羽正之と云、正之も越ヶ谷に住すとあり、今越ヶ谷に会田氏の子孫なし、表徴して江戸に移れりと云、此の富古エ門の家は、彼越ヶ谷に住せし会田氏か天族なりしや、会田は前掲せられどもその詳かなること知らず。

卷二百三 河上郡 越ヶ谷領 神明下村

政重院

新編武蔵風土記 四下野村迎橋院内庭、月白山と号す

当院は相氏七左エ門の祖先 会田七左エ門政重、妻 慶登御定足違福の爲に造営す。棟札に寛永十九年閏月三日とあり、按にこの政重と云うは会田系図に三郎

た回正重と云ものをさす別人にや、さもあらば、北條十郎氏房に属せしものなり。慶登は元初公年六月二十三

日に死セリ、又山号は後妻の法名にて、本尊正親言は
政重が守護なりしといひ伝へり

越ヶ谷領 七左エ門村

千親照院

新基眞言宗

未田村金剛院末、日映山と号す、同山

尊慶、又僧有弁、承応三年申渡せり、同寺は当村を開墾

せし念回て左エ門にて、その法名日映親照と云を以て

山号寺号とす、本尊外施を安す。

系図中に、初代七五三門政重(一六四三)寛永十九年十一月十日

卒 六十三 日映親照清信二(一五八八)天正八年の生

越ヶ谷氏の蔓 市史 七五頁 下段

寛永初越ヶ谷田出羽表門前へ捨子有之、小袖守袋短刀

等相添有之、江戸表由緒之小見と相見へ申候同養育

致候処、生長之後才覚不尋常、会田七左エ門政重と名

付、出羽三男之処、槐戸耕地沼付等開墾致神明下耕地

に居住し、弟会田八郎兵五成者古新田耕地に遺す、是

七左エ門村、大同野村、越巻新田等也。

1. 出羽地区才一の開墾者は会田正之か出羽張を開き
しによりかく唱ふと有りますので正之であり、出羽村

出羽張という名稱が残り、次に会田七左エ門政重が

「会田出羽願立、新堀堀筋当り申候所」と有り如く才

二開荒出羽三男之処、槐戸耕地沼袋開墾致し神明下耕

地に住居す 会田出羽の願立により会田七左エ門政

重が開荒したことになる

2. 政重院の墳に「按に政重と云は、会田系図に三郎

左エ門正重と云ふものをのす同人にや」と有るが、七

左エ門政重は天正七年(一五八八)生れてあるので別人である、

3. 会田七左エ門(政重)の過古帳に政重養祖父法室・妙

伝養父母名に道真禪定門・妙林禪定尼と有るが、

この三郎左エ門正重の子孫に出羽正之有り、この正之

と同係ありと思えるが何処の家か今の処不明である。

四丁野会田太郎兵五家なる石の過古帳に三十七代

十代太郎兵五木太郎六男俗名義盛 五十三 正徳院悟山
義道居士昭和三十六年九月五日と云う者有り

過三帳には「初代太郎兵二の名見えず、松壽高末清信
 女中係四・正月十一日当屋敷初代妻 当家御取立之
 祖也」と、四丁野会田家にはこれ以前に二十七代有る
 ことになり、義盛氏の妻 春子氏曰く「松六の家は三
 人で三十七代と申しております。先祖は会田立科介
 と云、小田原北條氏に代々仕えて居ったそうだが
 中途で絶えて太郎兵三家となり古い事の古いたものや
 物的のものは何もありません。但し元の四丁野の屋敷
 には古い五輪塔が天山ありましたが今は迎経院の当家
 の墓にあります」と、迎経院には寛永六年の墓三
 は見えますがそれ以前のものには五基ありますが年代も
 式名も解説不可能でした。何れにしても三之に同姓の
 る家系と思はれますが不明です。二代太郎兵三佐次郎
 は、市史四 七十三頁下段に 会田党之説 荒々々に
 記置之候事の中に 会田佐次郎 四丁野村とあり
 越谷会田の一族でありますが 初代に御取立の祖とあ
 るか不可思議であります。

疑問七、 これより一六迄見えますと、会田太
 郎兵三家の前身は、「小田原北條家に仕えていた」
 現在で三十七代目である事々

会田生羽清清の出身地が信州会田より来るとあるに、
 かかはらず、小田原氏の家臣として武州葛西を領した
 兄が居ると云う事で、信州会田より来た事にはならず
 いか不可思議に思われます。

疑問八、 永正六年 連歌師「宗長」の作とされて
 いる「東路の郡登」と云う 紀行文中に会田弾正忠定

祐なる人物が「下総国葛西庄、市川と隅田川ふたつの
 中の庄なり」とあり前で 作者の宿所の世話をしている。
 すると会田家資料十二頁 「小田原衆所領役帳」永禄
 二年にある会田中務丞なる人物と静岡会田系図にあり
 中務丞信清とは同一人物であるから、この記録以前に
 天文二十一年「小田原秘鑑」小田原因書館所蔵の中に
 御馬廻り衆一三持白世騎中に会田中務丞の名が初見す
 ることかできます。又「小田原衆諸役帳」永禄二年

御馬廻り衆一三持白世騎中に会田中務丞の名が初見す
 ることかできます。又「小田原衆諸役帳」永禄二年

頃に玉繩城知行役中に江戸衆八十一名中二十二番目に
会田中務丞の名有り

以上考按するにどうしても小田原方より越谷に住した
会田と上杉方として岩付太田と親しい会田と二家から
ければ理解がつかないのであります。

今般に静岡会田家の系図の中務坐信清以前と 四丁野

会田家が旧家者富右二門家の先祖書に付け加えて見ま
すと、小田原方上杉方と変遷したことを信州会田郷より

来るといふ事、永正年中に豊西の地に会田正定禰定
が居住していた事、天文二十一年小田原禰鑑に見えろ

事、永祿二年小田原家諸領後帳に記されていること
など一致するわけである。静岡会田家と四丁野会田

家の先祖を入れ替えた事と云ります。

疑問 九 越谷 鼠の憂、市史四 七五頁 上段

会田四郎兵衛義 御入国時分より落着 出羽一同胤定

之党にして旧家也、分地多其後退転仕候、会田久右、
は此党なり、東名主と唱申候代々御檢地名前請来候処

六左二門代に成基字 文之助と申番代に而寛政申退転

(1) 新町会田久右二門家は幕末遠東名主を勤めていた

家柄ですが、その本家は会田出羽一門にして同道六家
の一つであり久右二門家はその初期の分家であります。

久右二門家 過古帳

玄徹——淨空——徹西——梅詠——淨意
慶長(1604) 万治(1624) 延宝(1685) 享保(1720)
(1604) (1624) (1685) (1720)

白貞
1604 1624 1685 1720

初代玄徹が五十五で卒したとすれば天文十八年の生れ

であり、この会田久右二門家の当主、会田三(越谷
新町二丁目)氏の話によれば「私の先祖の出は信濃国

四百村と云う所に会田という姓があり、そこに広田寺

という寺が先祖の墓のある寺である。私の祖父は毎年

秋の彼岸に信濃の善光寺へ詣り、その帰りに広田寺へ

廻ってお詣りして来ておりました。という事実があり

私も祖父の言い伝えの寺を一度見ておきたいとの念願から
数年前に詣りて来ました。」と

以上の結果 靜岡會田家系圖を書き替えたとすれば、その先祖が信州會田郷より来るといふのみで、それ以前が解らぬばかりな事になります。そこで會田寺へ調査に行つた結果をここに記します。

會田郷

大正七年参行の東海摩郡家名一覽の中には、會田姓は一家もなくまして、會田郷中にも、會田寺檀家中にも全然見当りません。

鎌倉時代地頭として會田氏が見え始め、會田郷は伊勢神官の御厨として會田厨の名で度々出てくる。次に諏訪神社の祭司中に會田氏は重要人物として見える。

建武新政の時、北条時行の中三代の乱、建武二年七月癸未、滋野氏一族味方する、會田も同族。

南北朝争乱時代にも前同様の名見える。

親應しんえいの乱、親應しんえいより、貞治二年まで続く。

応永元年（一三六八）五月武蔵の平一揆、河越にて起る。

明德二年（一三九二）上野清の乱、白野の合戦。

・応永六年（一三九九）十月、大塔の合戦始まる、水内郡

石渡で合戦、この時、信濃守が、信濃守に叛き、足利

義満の命により、信濃守が、信濃守に叛き、この戦

は、信濃守が、信濃守に叛き、この戦

は、信濃守が、信濃守に叛き、この戦

は、信濃守が、信濃守に叛き、この戦

は、信濃守が、信濃守に叛き、この戦

は、信濃守が、信濃守に叛き、この戦

は、信濃守が、信濃守に叛き、この戦

は、信濃守が、信濃守に叛き、この戦

は、信濃守が、信濃守に叛き、この戦

は、信濃守が、信濃守に叛き、この戦

は、信濃守が、信濃守に叛き、この戦

は、信濃守が、信濃守に叛き、この戦

は、信濃守が、信濃守に叛き、この戦

は、信濃守が、信濃守に叛き、この戦

は、信濃守が、信濃守に叛き、この戦

は、信濃守が、信濃守に叛き、この戦

率人 その為 幸清も浪人す。

大塔合戦に長秀方に属したと有るにより、前領の会田

郡は必然的に岩下会田氏の領すも廻となった事が明白

である。静岡会田系図のは、海野会田次郎が建長年代

に会田郷に入部して会田次郎と名乗り 大塔合戦に

小笠原長秀の敗北により、応永七年以后岩下会田となり

会田郷の前領を失う。 以后此の会田郷に關する記述

は総て 岩下会田氏である。

上杉輝秀の乱 応永二十三年 小笠原政康(長秀の弟)

戦功あり応永三十年 管領足利持氏が板渡を譲えし

各地で戦闘をはじめ 応永三十二年信濃守護職に復

活政康任命される。

軍団の長として碓氷峠を越え上野國に出兵する

永享の乱 永享十年 持氏の上杉憲実討伐の事を

期に幕府は持氏征討の軍を起す。

結城合戦 (永享十三年(二四〇〇)) 政康の元長將戦死 子五郎宗康が員

傷するが結城氏朝が擁して旗上げ 持氏の遺児春三丸

母三丸元長と捕まらる。

三嘉言元年 三嘉言の乱 三嘉言二十八月九日 政康卒す。

將軍義教が赤松氏に暗殺される、幕府の権力急速に

落ちる。

文安三年三月 長将の子持長は 政康の子宗康 光康

の相続は不当であり、長基の長子 長将 持長

に相続すべきと訴えた。 長基の二子長秀が相続し

たものこそその弟政康に行き、その子宗康と光康に相

継がれてしまったことに対して 持長に相続有るべき

と時の幕府に訴えた。

長秀が持長に譲与するとの証文がなく、又宗康 政康

にこの護状がないが、宗康が領すべきと判決があつ

たが、これを不服として武力衝突となり 文安三年

信州水内郡漆山原に戦つてゐる。宗康の死後守護職な

どの公認が宗康の弟光康系を正統と見なして一貫さ

れていなか、た事の証に、この合戦の六年後宝徳四年

諏訪神社の頭役氏に「太夫守守護殿し其は「守護大結

